第三章　遺産

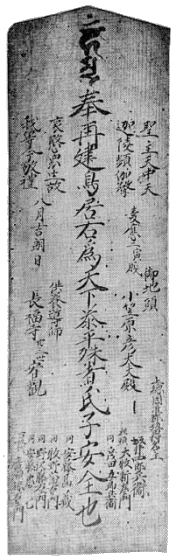
第一節　現存遺産

❒両部鳥居（坂田）

両部鳥居とは、本体の鳥居を支える形で稚児柱（稚児鳥居）があり、その笠木の上に屋根がある鳥居のこと。名称にある両部とは密教の金胎両部（金剛・胎蔵）をいい神仏習合を示す名残である。

坂田八幡神社「両部鳥居」

長福寺が保存している棟札には、慶應二（一八六六）寅歳に鳥居を再建したことが墨書されている。この棟札の御地頭「小笠原彦太夫殿」は坂田八幡神社再建（天和四年）に尽力した地頭で、小笠原氏は幕末までこの地域一帯を知行したようだ。棟札が作られた前年の慶應元丑年五月「上総国周准郡人見村川除御普請出来形帳」に小笠原彦太夫知行所とあり、この地域一帯の地頭として幕末まで踏襲されてきたのだろうか。この「両部鳥居」がいつ創建されたか資料がないので不詳である。



御地頭
慶應二寅歳　小笠原彦太夫殿
奉再建鳥居右爲天下泰平殊者氏子安全也

両部鳥居の代表的なものとしては「安芸の宮島」と呼ばれる厳島（宮島）神社の鳥居がある。市内には俵田の白山神社ほかにもみられる。

❒仁王像（人見）

仁王門は人見神社表参道より第一、第二石段を登った金毘羅神社前広場付近に建っていたが明治四三年（一九一〇）八月、数日間続いた豪雨で発生した山津波で人見山南斜面が崩れたとき、土砂に巻き込まれ仁王像もろとも小糸川方面に倒壊落下した。このとき青蓮寺の本堂・庫裡や旧金毘羅神社（第三石段を二〇～三〇m登った右側にあった）にも甚大な被害を及ぼしている。

仁王門跡（現金毘羅神社前広場付近）

押し潰された仁王門は後日掘り出され、中から仁王像を取り出したがバラバラになって無残な姿だった。一時的に青蓮寺の仮小屋に安置されたが、その後は本堂・庫裡の再建をへて庫裡の二階に移されていた。昭和四五年五月二一日から二三日の三日間、庫裡取り壊し作業がおこなわれたとき、天井裏よりおろされ約六〇年ぶりで表にでたが、破損の箇所が多く修理さえ出来ない状態だった。

仁王尊　顔面・胴体部
（昭和 45 年）

仁王像のご身体は一丈（約三m）。胎内に「寛文七年（一六六七）八月、武州豊島乃産、江戸中橋桶町の住居（ママ）助右門・清右門の作」とあった。

仁王像は、寛政九年（一七九七）人見妙見社が小笠原兵庫と氏子の浄財で春日造りの社殿に造営された一三〇年前に奉納されていたことになる。

「人見山　青蓮寺と仁王尊を偲ぶ」の著者川名邦五郎は子供の頃（一一才）に見た倒壊前の記憶として〝近隣にない朱塗りの豪壮な構造物だった。現存していれば貴重な文化財になっていただろう〟と回顧している。また、青蓮寺は天文九年（一五四〇）、宝暦五年（一七五五）、明治二年（一八六九）に火災で全焼しているが、仁王門・仁王像は罹災を免れたのだろう。

庫裡より取り出された個体は一時期、君津市役所独身寮に保管されていたが、現在、文化財保護のため八重原小学校の空校舎で保管・管理されている。

❒石造随神（人見）

随神（ズイシン）とは平安時代以降、貴族の外出時に警護のために随従した近衛府の官人のことである。また、日本の神道において、神を守る者として安置される随身姿の像のことも随身といい、この場合は随身とも書かれる。また、門守神（カドモリノカミ）・看督長（カドノオサ）・矢大神・左大神とよばれることもある。門に向って右側の神像が左大神、左側の神像を矢

石造随神像　矢大神　　**石造随神像**　左大神

大神ともいう。随神像は木造が一般的で、人見神社の石造随神は千葉県内でも珍しく貴重な遺産であるという。

※参考資料

寺院の「仁王門」には仁王像が安置され、神社の「随神門」には随神像が安置される。木像の随神としては君津市俵田「白山神社」の随神門内に随神像がみられる。

君津市俵田白山神社　木造随神像

❒青蓮寺天井絵と弁財天画額（人見）

青蓮寺本堂の格天井に極楽浄土にあるだろうとされる動植物画が三五枚描かれている（口絵に全画掲載）。

青蓮寺は明治四三年の大雨によって裏山が崩れ、本堂・庫裡が倒壊し、大正元年に再建したのでこの絵がいつ頃描かれたか不詳。一説によると、むかし人見の十郎（秋元）家に日本画家（伊東深水の弟子という絵描き）が寄留していたので、多分その人ではないかという話もあるが定かではない。約一〇〇年が経過して時代の流れとともに色あせてきてはいるが、描かれた当時は見事な色彩だったと想像される。

天井絵（嗔風亭古嶽作）

天井絵のなかの一枚に雅号が見える。書はかすれているが達筆で、拡大すると「古嶽謹書（花押）」と読める。

また、本堂左脇陣の欄間には一枚の画額が掛けられ、琵琶湖の竹生島を称える次のような漢詩が書かれている。

画額（古岳謹書）

嗔風亭古嶽謹畫之

無明照辨財天
竹生島浪波穏
倬魚勝庸海富
漁翁晋不知難
常佩奈琵琶曲
清光古来澌知
七福神之禰賞
経豈家了廻
家内日々壽
風一岳絵画
君為揮異国
渡来之神雖
礼為必有利益
天銕我意書為
一賦題

嗔風亭古岳謹書

※画額文読み下し
（「雨城古文書同好会」会員相川新一）

嗔風亭古嶽謹畫之

無明を照らす弁財天
竹生島浪波（ナミ）穏やか
倬魚（タクギョ）勝れて庸（ツネ）に海富める
漁翁（リョウノオキナ）晋（アマネク）難を知ら不（ズ）
常に佩（オ）びる奈（ナンゾ）琵琶の曲
清光古来、澌（ツ）きるを知る
七福神之（コレ）、禰賞（ホメタタエル）
経（ツネ）に豈（ネガウ）家廻（メグル）を了（サト）る
家内日々壽（ヒサグ）
風一岳の絵を画く
君が為異国に揮（フル）う
渡来之神と雖（イエド）も
礼を為（ナ）せば必ず利益有り
天銕（カタク）我が意を書く為
一賦を題す

嗔風亭古岳謹書

二作品の署名をみると天井絵は「古嶽謹画」、画額は「嗔風亭古岳謹書」と書かれているが、作者は同一人物と考えてよい。いずれも、力作で相当の技術と才能を持つ人の作風である。不確かさはあるが伊東深水の弟子に相応しい作品だと推察される。

❒海苔づくり道具（人見）

1、海苔篠（ノリヒビ）

〈目的〉海藻の海苔を付着させて繁殖させるために浦に立てる木（まてば椎）の枝や竹で篠をつくる。

昔のヒビづくり

〈篠の種類〉近江屋甚兵衛が海苔作りを始めたころは、おもに「木の篠」。大正時代の中頃から「竹ヒビ」。昭和に入ると網（ワラ・シュロ）。その後、ヤシからとれるコイルヤーンなどの天然繊

維、昭和三〇年頃から化学繊維へと変化した。

「まてば椎」の簗
～江戸後期～

2、簗たて

〈目的〉海苔養殖で胞子を付着させるため簗を海中に並べて立てる。

ヒビたて

〈道具〉フリボウ(海底に「ヒビ」を立てるための穴あけ棒)・高下駄・杭・手押しポンプ・動力ポンプ。沖の深い所ではスイコ（水といっしょに海底の砂をはきだすもの)とガータ(スイコを入れる筒)などを使用した。

フリボウ

杭

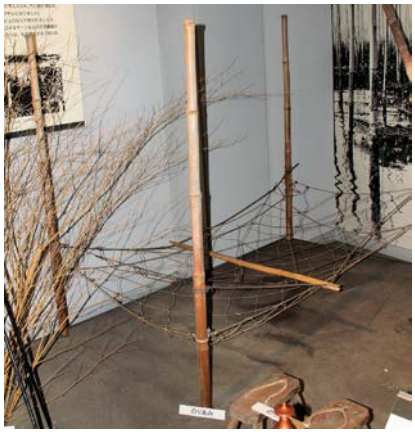
高下駄

手押しポンプ

3、海苔採り

〈目的〉簗についた海苔をとる。

〈道具〉海苔採りに使われる舟（伝馬



海苔網

「海苔採り」と「海苔採り舟」
伝馬船：ひとり乗り用の木製の舟。

船）・大小二本のカイ・海苔ザル・洗いザル・アカトリ（舟の中の水をかき出す）。

回転吸込式海苔つみ機（昭和三九年頃、先端のカッター部分から海苔が海水と一緒に吸い込まれて網を張ったカゴの中にたまる）。

洗いザル

アカトリ

回転吸込式海苔つみ機

4、海苔切り

〈目的〉海苔を細かくする。

〈道具〉二丁の包丁と長方形のまな板（江戸時代から明治時代前半）。ケヤキを輪切りにした海苔切り台（明治後半）。二～三枚の刃がついた飛行機包丁（昭和）。何枚かの刃を着けたツキ包丁（飛行機包丁）の改良型。

ツキ包丁

5、海苔簀（ス）作り

〈目的〉海苔を薄く伸ばして乾かすときに使う。

〈道具〉す編み台（海苔簀を編む時に使う道具）。孟宗竹を割った「はじ竹」。細丸竹三本。ヨシの茎八〇～一〇〇本。

左：はじあみ　右：はじ竹

す編み台

す編み機
～昭和 25 年頃から使用～

6、海苔つけ

〈目的〉一枚の海苔にする作業。

〈道具〉「フネ」と呼ばれる箱。海苔簀の上に型をとるための枠。

海苔つけ
左上：つけます　右上：つけわく
左下：つけぶね　右下：のりず

う ま
海苔をつけた「のりず」を置き、
水切りする。

7、海苔の乾燥

✤枠乾し

〈目的〉障子乾しとも呼ばれる。障子の桟のような枠をつくり、そこに鋼鉄を二つに曲げたものを木の枠に打ちつけ、海苔簀をかけて乾かす。

〈道具〉障子の桟のような枠。鋼鉄を二つに曲げたもの。海苔簀。

✤台簀乾し

〈目的〉ワラの垣根を作り、その上にヨシズを張り海苔簀を並べ、メグシで留め、海苔簀につけた海苔の水を切り乾かす。

〈道具〉ワラの垣根。ヨシズの海苔簀。メグシ（海苔をつけた「のりず」をしっかりと「だいず」に固定するための竹串）。

8、海苔はがし

〈目的〉ムシロなどを敷いた上に海苔簀の状態で重ねておき「はがし板」を使って一枚ずつ丹念にはがす。

〈道具〉ムシロ。はがし板。

海苔はがし作業

9、海苔たたみ

〈目的〉はがした海苔は一〇枚ずつたたんで海苔箱に入れ商品として出荷。

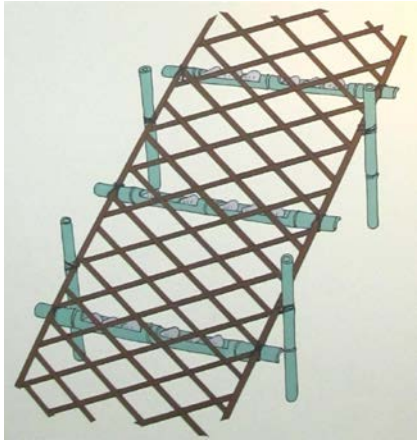
〈道具〉海苔一〇枚。海苔箱（内側にトタンやブリキを貼って密封性を高め、海苔が湿気ないように工夫）。

10、牡蠣殻による種付け法

〈目的〉秋に海中にあらわれる胞子は春から夏の間、牡蠣（カキ）殻の中で「糸状体」とよばれる菌の姿で過ごすことが発見（昭和二四年、英国マンチェスター大学の学者ドリュー）された。

この仕組みを利用した種付法（海に張った海苔網の所々に半分に割った竹やビニール袋のような容器をとりつけ、その中に牡蠣殻糸状体をいれる）で良質な海苔と収量の向上がはかられた。

〈道具〉海に張った海苔網。半分に割った竹。ビニール袋のような容器。



牡蠣殻による種付け法

（漁業資料館「展示資料」より抜粋）

❒地殻変動など観測機器（人見）

1、二等三角點標石

二等三角點（人見神社納札所付近）

人見神社（納札所付近）にある二等三角點標石は、小高い丘で周囲の視界確保が得られ測量の基準として好条件であることから、明治一八年（一八八五）三月設置された。日本の「三角測量史」における貴重な遺産である。

2、菱形基線測点

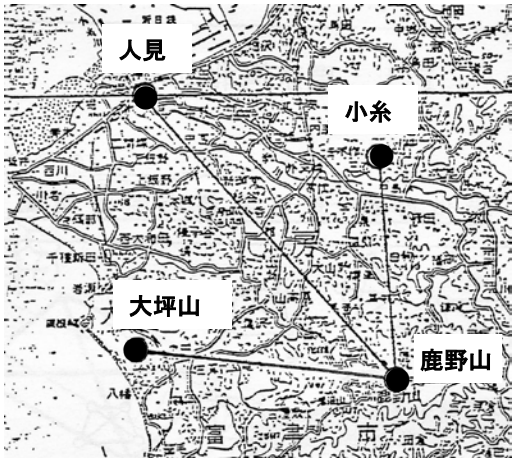
昭和三九年六月～七月、全国一四ヵ所（厚岸・水沢・房総・館山・丹那・高田・長野・御前崎・豊橋・京都・白浜・鳥取・八幡浜・宮崎）に設置されたうちの一ヵ所で「辺長測量」を実施

し、地殻変動の検出をしてきた。この菱形基線も展望所奥水神様付近にあり、一辺二五cmの八角、対辺間六〇cm、地上高さ五〇cmのコンクリート柱、上面中央には直径三cmで＋印のある金属標が埋め込まれ、側面には幅一二cm、高さ六cmの金属プレートに「NO・5基本　菱形基線測点　建設省国土地理院」の刻印がある。

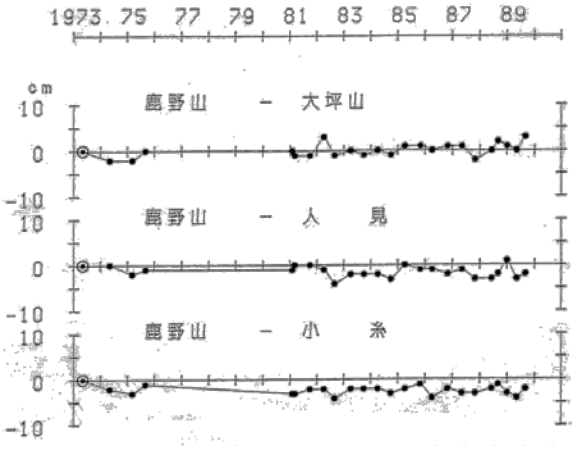
基準　菱形基線測点（人見神社展望所）
～平成23年7月1日～

3、千葉県の観測点

君津市周辺の「房総地区」と館山市周辺の「館山地区」で実施され、始点側に光波測距儀、終点側に反射鏡を設置し基線間の距離を計測した。



房総菱形基線場位置図



辺長の経年変化

房総地区は「人見（北西）」「小糸（北東）」「大坪山（南西）」「鹿野山（南東）」四観測点相互間（六基線）の距離を計測し、昭和四二年二月と翌年二月に観測した。

4、四観測点間による測量終焉

その後、昭和四八年～平成四年、変動地形調査（精密変歪（ヘンワイ）測量）として毎年一～二回程度、鹿野山～人見・小糸・大坪山の三基線を繰り返し観測してきたが、鹿野山と三基線間の視通確保が困難になってきた等により鹿野山を始点とした観測のみとなった。

平成一八年四月、人見神社から南東約一kmの小糸川沿い（現在の人見保育園）に観測点（ミラー）を移設し観測していたが、平成二三年三月人見保育園の新設に伴い、さらに東に約二〇m（現在地）移設された。

観測の目的は、東京湾周辺地域を中

反射鏡（人見保育園付近）

心に首都直下地震の前兆現象、活断層周辺の地殻歪の検出、地殻変動の活動度や歪みの蓄積を把握するとともに、地殻変動の時空間変化を明らかにすることを目的として行い、地震予知連絡会へ資料提供していた。

「この反射鏡は、鹿野山にある光波測距儀の光波を反射させ精密に測定するための鏡で、房総半島中部の地殻変動を監視するために設置された大切な施設です」。

鹿野山からの距離　約一一、一七km

連絡先　千葉県君津市鹿野山

国土地理院鹿野山測地観測所

０４３９－３７－２６６１

（反射鏡側面掲示物より）

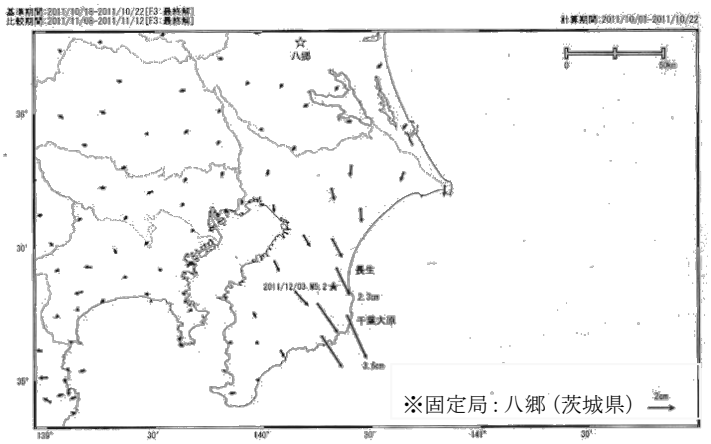
5、電子基準点網の整備

現在は、ＧＰＳ衛星を利用した電子基準点網が全国（一二四〇点）に設置され、リアルタイムで地殻変動を監視できるようになったため平成二四年で休止（中止）された。

※資料出典：国土地理院測地部計画課

房総半島での非定常地殻変動

房総半島で平成 23 年 10 月 26 日頃から 11 月 8 日にかけて、南南東方向へのゆっくりとした非定常的な地殻変動が観測された。

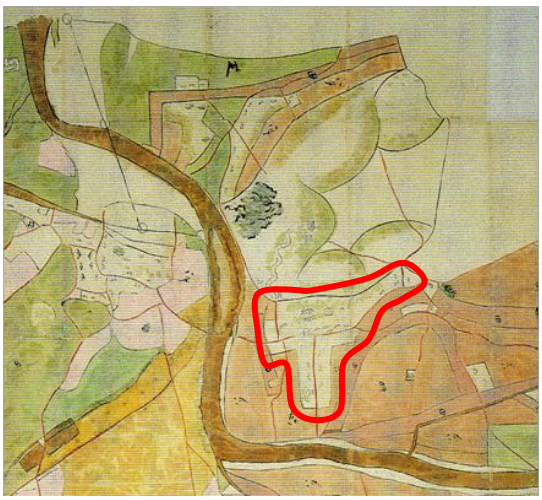


第二節　消滅遺産

❒塔中寺院大聖寺（人見）

青蓮寺の境内は広く一八〇〇坪有り、元禄七年（一六九四）甲戌一二月一二日の古絵図には、本堂と山門が描かれ、大きな伽藍だったことがわかる。

境内東側墓地に塔中寺院（大寺の中の別坊）大聖寺が建てられていた。水神山本覚坊と号し、※法印聖運（享保八年（一七二三）一〇月二〇日没）を初祖として八代続いた。



青蓮寺境内古絵図（赤枠内：本堂・山門が見える）

大聖寺が建立されたとされる約三〇年後の宝暦五年（一七五五）一二月一二日、火災により堂宇が焼失し古文書・過去帳など古いものが残ってないので再建の有無については不明である。

明治一七年（一八八四）までの財産届け書きが過去帳と共に残されているが、その後に青蓮寺に合併された。

大聖寺の御本尊不動明王は、合併した青蓮寺に移し祀られている。

（『人見郷土誌』）

※本書「第一一章　金石文　引用資料・補足説明 12」参照

不動明王

❒波の伊八彫刻（人見）

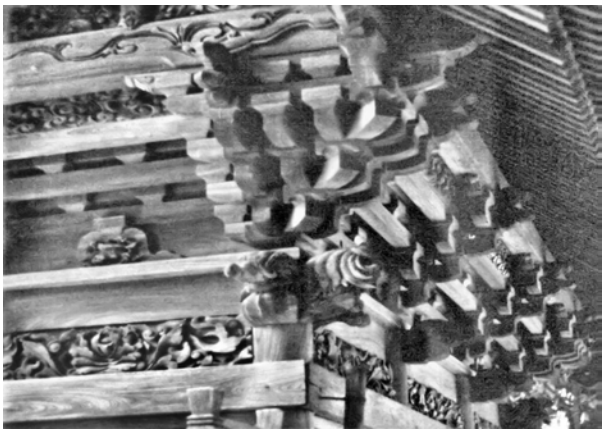
人見神社は、寛政九年（一七九七）一二月二二日、小笠原兵庫信偏（ノブエキ）と氏子の浄財で造営された春日造りの社殿で、江戸文化の粋を集めた一五〇点余の組物と 精密な彫刻の出来栄えが地元で高く評価されていた。

製作履歴など不明のまま、昭和四五年四月九日未明に発生した 浮浪者の火の不始末 で本殿や彫刻などが全焼したため幻の遺産となっていた。

作品の所在が忘れ去られようとしていた平成二三年、高瀬一利氏（市内外箕輪在住）より、昭和四〇年五月一三日に撮影した人見神社の組物と彫刻写真の提供があった。

焼失前の人見神社
（昭和 40 年 5 月 13 日）

建造物は春日造りの見事な組物、彫刻は向拝に嵌め込まれた龍。そして右脇陣は「董奉（トウホウ）」、左脇陣は「馬師皇（バシコウ）」で評判通りの見事な作品である。



社殿の 150 点余の組物・彫刻

董奉は中国が魏呉蜀に分かれていた三国時代の仙人で、人間界に三〇〇年ほど住み、病気の人々の治療をしたと伝

えられている。三〇〇年も人間界にいたが、仙人であるため董奉の姿は歳をとることがなかったという。董奉の傍らには常に虎がおり、害をなす者には襲いかかり困っている者は助けたと言われている。

董奉（右脇陣）彫刻

馬師皇（左脇陣）彫刻

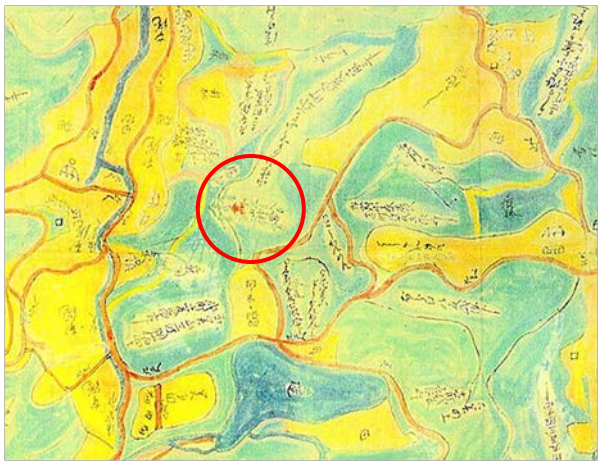
馬師皇は中国の神話時代・黄帝の頃（紀元前二五世紀）に、馬の医者だったという伝説上の人物。馬師皇が診察した馬はたちまち元気になったといわれるほどの名医だった。ある時、龍が空から降り馬師皇に診察を求めるとたちどころに診断を下し、治療を行い、龍の病を治したそうだ。のちに馬師皇は龍の背に乗り何処ともなく姿を消したという。（『中国の神話・民話：幻想世界神話辞典』）

これらの写真を手掛かりに鴨川郷土資料館・石川丈夫学芸員に鑑定依頼したところ、初代伊八作であるとの評価を得た。武志伊八郎信由（初代伊八）は、安房国（現鴨川市西条地区）で生まれ、文政七年（一八二四）七三才で没するまでの約五〇年にわたって、寺社建築を装飾する彫刻を製作する彫物大工で、特に躍動感に満ちた波の表現が優れていることから「波の伊八」と呼ばれた。

初代伊八の彫刻製作年表には、寛政八年（一七九六）から享和三年（一八〇三）迄の七年間に作品がない空白期間があった。この期間は人見神社の社殿を春日造りに造営した寛政九年（一七九七）頃と時代的に符合する。また、波や龍の彫刻作品が初代の作風であることから、四五才頃の彫刻作品に間違いないと比定された。この人見神社彫刻写真は、伊八の歴史年表の空白を埋め、幻だった江戸時代の周西文化史を蘇らせた。

❒山神宮

文政二年（一八一九）の坂田古絵図に「山神宮の赤い社」が描かれている。



「山神宮」　文政２年坂田古絵図

絵図より場所を推定すると「本縄」と「とうかんめん」の中間部で、現在の「本名輪遺跡公園」付近にあたり、君津台三丁目「とうかんめん公園」の西側と南側二ヵ所からのぼれる。

「山神宮」の跡地を探すため柵で囲われた東側の土手を少し上がると一〇坪位の広場があり高さ九〇cmの石祠があった。正面屋根部に「山神宮」、右側「寛政四子年一一月吉日」、左側に「茂田五良兵エ」と彫られている。石祠はこの人が奉納したのだろう。

「山神宮の社」跡地　本名輪遺跡公園東側

探索の結果、石祠と地籍図・古絵図の状況より、ここが里人から〝さんじんさま〟と呼び親しまれた「山神宮の社」があった場所で、山神宮の建立年は寛政四年であると比定された。

❒周西の水車

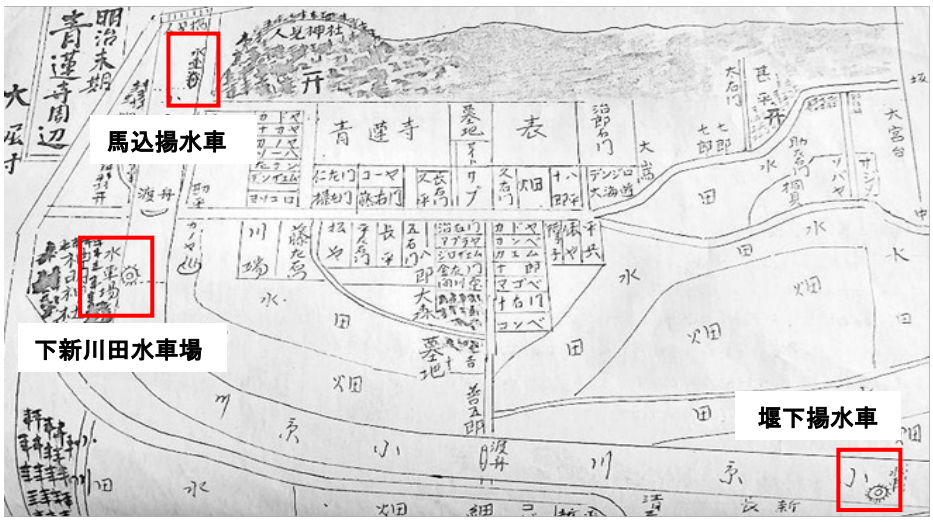
寛政四年（一七九二）、大堀村から人見村に出された「水車掛日限之儀人見大堀村両村取替議定書」に水車の記述がある（『人見郷土誌』）。

明治二八年（一八九五）三月、周西村人見部落（ママ）と飯野村二間塚との間で交わされた「用水車設置契約書」に、人見字下新川田の田方用水車設置に関する文書はあるがどこにあったのかわからなかった。

ところが、青蓮寺檀家総代川名邦五郎記（「人見山青蓮寺と仁王尊を忍ぶ（ママ）昭和四五年五月　庫裡建築記念」）の明治末期「青蓮寺周辺」手書き地図に当時の水車設置場所が記入されている。この地図より下新川田用水車を特定することができた。

一、下新川田用水車場

設置場所：人見字下新川田（人見耕



小糸川河口付近の揚水車位置図（明治末期青蓮寺周辺）川名邦五郎　作図

地整理地内)。

飯野村二間塚との関係（設置場所、工費など）で評価する必要がある。

◇設備概要

明治四二年（一九〇九）五月

灌漑面積　三、五ha

・型式　流し込み

・突揚程　三、六m

・揚水量　〇、五七五kℓ／分

妙見山より中橋方面（左上部枠内:下新川田揚水車場跡）
～昭和８年　写真所有者:鶴岡しげ～

・水車　直径　五、五m

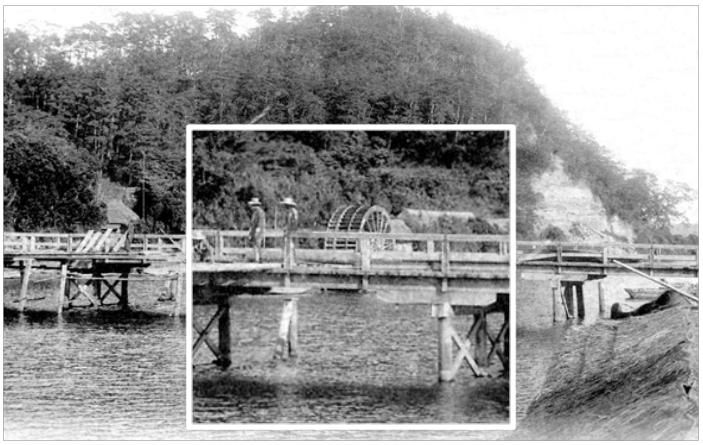
・輪幅　二、四m

・回転数　三、五回／分

・工費　三七〇円

二、馬込揚水車

設置場所：人見字馬込九〇二番地。小糸川の水をせき止めて一部の水を下に落とし、これを利用して水車を据え付け、川の水を汲み揚げ耕地に水を送



馬込揚水車(白枠内)
～絵葉書消印:大正６年７月７日　写真所有者:河井衣子～

る水車が設置された。神門もこれに見習い留場を新設して同型の水車を据付けた。この水車を製作したのは吉野村八田沼の大工石井桂蔵で、明治二二年七月（一八八九）完成した人見神社の御神輿も石井桂蔵の作である。

◇設備概要

明治三五年（一九〇二）四月修理。

灌漑面積　二〇、二四ha

・型式　流し込み

・揚水量　一、四五kℓ／分

・水車　直径　五、五m

輪幅　二、四m

・回転数　五回／分

・工費　一、〇七〇円

三、堰下揚水車

設置場所：人見字堰下三六三番地。明治二七年（一八九四）とあるが型式などは不詳。

◇設備概要

明治四三年（一九一〇）四月、老朽化のため改修。灌漑面積二八町歩。

・型式　流し込み

・水車　直径　一九尺（五、七ｍ）
　　輪幅　一五尺（四、五ｍ）
・回転数　五回／分
・工費　一、九四〇円

四、その他揚水車

　このほか小糸川上流域の中野・久保にも水車があり、当時として最良の農業機械だった。ちなみに、昭和五年改造（二回目）された久保揚水車は直径約一〇、九ｍで、鉄骨製大車が原動車の側方に取り付けた小車と歯車の噛み合わせで回転する構造になっていた。

久保揚水車と堰止め場

　富久橋が出来る前の水車は、橋の少し上流にあり川を堰き止めた水を久保の原へ揚げていた。堰を切る日は清和方面から木炭・薪を一杯積んだ川舟が何隻も揃い、木材をつらねたイカダも勇ましい掛声と共に下った。

❒灯台（人見）

　大正天皇御即位記念共同施設事業として、大正四年三月二二日、灯台を設置することが議決された。

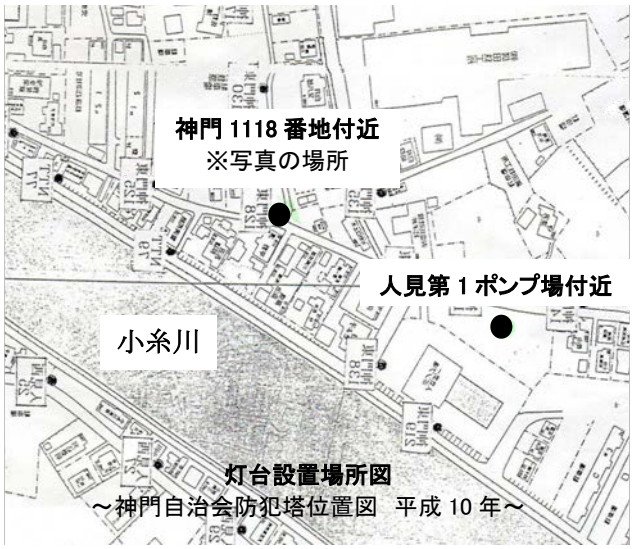
　また、史料には灯台の写真が記載され、昭和四〇年頃まであったと但し書きされている。

灯台（大正天皇御即位記念）

（『君津町漁業協同組合史料集１』の目録番号７３-４６　人見漁業組合）

　この情報を手掛かりに設置場所を調べたところ、平成一〇年「神門自治会防犯塔灯台位置図」による場所表示提供があり、神門一一一八番地付近に一基、人見第一ポンプ場付近に一基、計二基あったことがわかった。

（情報提供　石井澄雄）



灯台設置場所図
～神門自治会防犯塔位置図　平成 10 年～

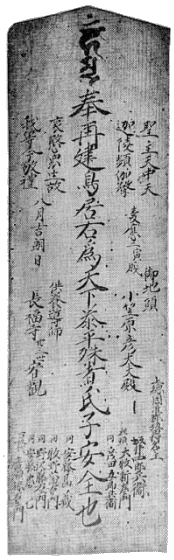
第一節　現存遺産

❒両部鳥居（坂田）

両部鳥居とは、本体の鳥居を支える形で稚児柱（稚児鳥居）があり、その笠木の上に屋根がある鳥居のこと。名称にある両部とは密教の金胎両部（金剛・胎蔵）をいい神仏習合を示す名残である。

坂田八幡神社「両部鳥居」

長福寺が保存している棟札には、慶應二（一八六六）寅歳に鳥居を再建したことが墨書されている。この棟札の御地頭「小笠原彦太夫殿」は坂田八幡神社再建（天和四年）に尽力した地頭で、小笠原氏は幕末までこの地域一帯を知行したようだ。棟札が作られた前年の慶應元丑年五月「上総国周准郡人見村川除御普請出来形帳」に小笠原彦太夫知行所とあり、この地域一帯の地頭として幕末まで踏襲されてきたのだろうか。この「両部鳥居」がいつ創建されたか資料がないので不詳である。



御地頭
慶應二寅歳　小笠原彦太夫殿
奉再建鳥居右爲天下泰平殊者氏子安全也

両部鳥居の代表的なものとしては「安芸の宮島」と呼ばれる厳島（宮島）神社の鳥居がある。市内には俵田の白山神社ほかにもみられる。

❒仁王像（人見）

仁王門は人見神社表参道より第一、第二石段を登った金毘羅神社前広場付近に建っていたが明治四三年（一九一〇）八月、数日間続いた豪雨で発生した山津波で人見山南斜面が崩れたとき、土砂に巻き込まれ仁王像もろとも小糸川方面に倒壊落下した。このとき青蓮寺の本堂・庫裡や旧金毘羅神社（第三石段を二〇～三〇m登った右側にあった）にも甚大な被害を及ぼしている。

仁王門跡（現金毘羅神社前広場付近）

押し潰された仁王門は後日掘り出され、中から仁王像を取り出したがバラバラになって無残な姿だった。一時的に青蓮寺の仮小屋に安置されたが、その後は本堂・庫裡の再建をへて庫裡の二階に移されていた。昭和四五年五月二一日から二三日の三日間、庫裡取り壊し作業がおこなわれたとき、天井裏よりおろされ約六〇年ぶりで表にでたが、破損の箇所が多く修理さえ出来ない状態だった。

仁王尊　顔面・胴体部
（昭和 45 年）

仁王像のご身体は一丈（約三m）。胎内に「寛文七年（一六六七）八月、武州豊島乃産、江戸中橋桶町の住居（ママ）助右門・清右門の作」とあった。

仁王像は、寛政九年（一七九七）人見妙見社が小笠原兵庫と氏子の浄財で春日造りの社殿に造営された一三〇年前に奉納されていたことになる。

「人見山　青蓮寺と仁王尊を偲ぶ」の著者川名邦五郎は子供の頃（一一才）に見た倒壊前の記憶として〝近隣にない朱塗りの豪壮な構造物だった。現存していれば貴重な文化財になっていただろう〟と回顧している。また、青蓮寺は天文九年（一五四〇）、宝暦五年（一七五五）、明治二年（一八六九）に火災で全焼しているが、仁王門・仁王像は罹災を免れたのだろう。

庫裡より取り出された個体は一時期、君津市役所独身寮に保管されていたが、現在、文化財保護のため八重原小学校の空校舎で保管・管理されている。

❒石造随神（人見）

随神（ズイシン）とは平安時代以降、貴族の外出時に警護のために随従した近衛府の官人のことである。また、日本の神道において、神を守る者として安置される随身姿の像のことも随身といい、この場合は随身とも書かれる。また、門守神（カドモリノカミ）・看督長（カドノオサ）・矢大神・左大神とよばれることもある。門に向って右側の神像が左大神、左側の神像を矢

石造随神像　矢大神　　**石造随神像**　左大神

大神ともいう。随神像は木造が一般的で、人見神社の石造随神は千葉県内でも珍しく貴重な遺産であるという。

※参考資料

寺院の「仁王門」には仁王像が安置され、神社の「随神門」には随神像が安置される。木像の随神としては君津市俵田「白山神社」の随神門内に随神像がみられる。

君津市俵田白山神社　木造随神像

❒青蓮寺天井絵と弁財天画額（人見）

青蓮寺本堂の格天井に極楽浄土にあるだろうとされる動植物画が三五枚描かれている（口絵に全画掲載）。

青蓮寺は明治四三年の大雨によって裏山が崩れ、本堂・庫裡が倒壊し、大正元年に再建したのでこの絵がいつ頃描かれたか不詳。一説によると、むかし人見の十郎（秋元）家に日本画家（伊東深水の弟子という絵描き）が寄留していたので、多分その人ではないかという話もあるが定かではない。約一〇〇年が経過して時代の流れとともに色あせてきてはいるが、描かれた当時は見事な色彩だったと想像される。

天井絵（嗔風亭古嶽作）

天井絵のなかの一枚に雅号が見える。書はかすれているが達筆で、拡大すると「古嶽謹書（花押）」と読める。

また、本堂左脇陣の欄間には一枚の画額が掛けられ、琵琶湖の竹生島を称える次のような漢詩が書かれている。

画額（古岳謹書）

嗔風亭古嶽謹畫之

無明照辨財天
竹生島浪波穏
倬魚勝庸海富
漁翁晋不知難
常佩奈琵琶曲
清光古来澌知
七福神之禰賞
経豈家了廻
家内日々壽
風一岳絵画
君為揮異国
渡来之神雖
礼為必有利益
天銕我意書為
一賦題

嗔風亭古岳謹書

※画額文読み下し
（「雨城古文書同好会」会員相川新一）

嗔風亭古嶽謹畫之

無明を照らす弁財天
竹生島浪波（ナミ）穏やか
倬魚（タクギョ）勝れて庸（ツネ）に海富める
漁翁（リョウノオキナ）晋（アマネク）難を知ら不（ズ）
常に佩（オ）びる奈（ナンゾ）琵琶の曲
清光古来、澌（ツ）きるを知る
七福神之（コレ）、禰賞（ホメタタエル）
経（ツネ）に豈（ネガウ）家廻（メグル）を了（サト）る
家内日々壽（ヒサグ）
風一岳の絵を画く
君が為異国に揮（フル）う
渡来之神と雖（イエド）も
礼を為（ナ）せば必ず利益有り
天銕（カタク）我が意を書く為
一賦を題す

嗔風亭古岳謹書

二作品の署名をみると天井絵は「古嶽謹画」、画額は「嗔風亭古岳謹書」と書かれているが、作者は同一人物と考えてよい。いずれも、力作で相当の技術と才能を持つ人の作風である。不確かさはあるが伊東深水の弟子に相応しい作品だと推察される。

❒海苔づくり道具（人見）

1、海苔篠（ノリヒビ）

〈目的〉海藻の海苔を付着させて繁殖させるために浦に立てる木（まてば椎）の枝や竹で篠をつくる。

昔のヒビづくり

〈篠の種類〉近江屋甚兵衛が海苔作りを始めたころは、おもに「木の篠」。大正時代の中頃から「竹ヒビ」。昭和に入ると網（ワラ・シュロ）。その後、ヤシからとれるコイルヤーンなどの天然繊

維、昭和三〇年頃から化学繊維へと変化した。

「まてば椎」の簗
～江戸後期～

2、簗たて

〈目的〉海苔養殖で胞子を付着させるため簗を海中に並べて立てる。

ヒビたて

〈道具〉フリボウ(海底に「ヒビ」を立てるための穴あけ棒)・高下駄・杭・手押しポンプ・動力ポンプ。沖の深い所ではスイコ（水といっしょに海底の砂をはきだすもの)とガータ(スイコを入れる筒)などを使用した。

フリボウ

杭

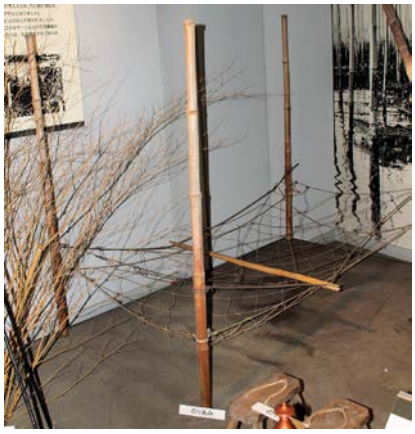
高下駄

手押しポンプ

3、海苔採り

〈目的〉簗についた海苔をとる。

〈道具〉海苔採りに使われる舟（伝馬



海苔網

「海苔採り」と「海苔採り舟」
伝馬船：ひとり乗り用の木製の舟。

船）・大小二本のカイ・海苔ザル・洗いザル・アカトリ（舟の中の水をかき出す）。

回転吸込式海苔つみ機（昭和三九年頃、先端のカッター部分から海苔が海水と一緒に吸い込まれて網を張ったカゴの中にたまる）。

洗いザル

アカトリ

回転吸込式海苔つみ機

4、海苔切り

〈目的〉海苔を細かくする。

〈道具〉二丁の包丁と長方形のまな板（江戸時代から明治時代前半）。ケヤキを輪切りにした海苔切り台（明治後半）。二～三枚の刃がついた飛行機包丁（昭和）。何枚かの刃を着けたツキ包丁（飛行機包丁）の改良型。

ツキ包丁

5、海苔簀（ス）作り

〈目的〉海苔を薄く伸ばして乾かすときに使う。

〈道具〉す編み台（海苔簀を編む時に使う道具）。孟宗竹を割った「はじ竹」。細丸竹三本。ヨシの茎八〇～一〇〇本。

左：はじあみ　右：はじ竹

す編み台

す編み機
～昭和 25 年頃から使用～

6、海苔つけ

〈目的〉一枚の海苔にする作業。

〈道具〉「フネ」と呼ばれる箱。海苔簀の上に型をとるための枠。

海苔つけ
左上：つけます　右上：つけわく
左下：つけぶね　右下：のりず

う ま
海苔をつけた「のりず」を置き、
水切りする。

7、海苔の乾燥

✤枠乾し

〈目的〉障子乾しとも呼ばれる。障子の桟のような枠をつくり、そこに鋼鉄を二つに曲げたものを木の枠に打ちつけ、海苔簀をかけて乾かす。

〈道具〉障子の桟のような枠。鋼鉄を二つに曲げたもの。海苔簀。

✤台簀乾し

〈目的〉ワラの垣根を作り、その上にヨシズを張り海苔簀を並べ、メグシで留め、海苔簀につけた海苔の水を切り乾かす。

〈道具〉ワラの垣根。ヨシズの海苔簀。メグシ（海苔をつけた「のりず」をしっかりと「だいず」に固定するための竹串）。

8、海苔はがし

〈目的〉ムシロなどを敷いた上に海苔簀の状態で重ねておき「はがし板」を使って一枚ずつ丹念にはがす。

〈道具〉ムシロ。はがし板。

海苔はがし作業

9、海苔たたみ

〈目的〉はがした海苔は一〇枚ずつたたんで海苔箱に入れ商品として出荷。

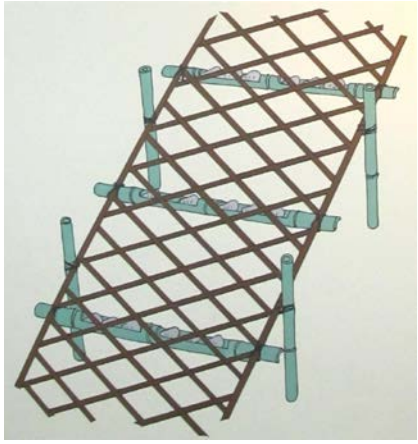
〈道具〉海苔一〇枚。海苔箱（内側にトタンやブリキを貼って密封性を高め、海苔が湿気ないように工夫）。

10、牡蠣殻による種付け法

〈目的〉秋に海中にあらわれる胞子は春から夏の間、牡蠣（カキ）殻の中で「糸状体」とよばれる菌の姿で過ごすことが発見（昭和二四年、英国マンチェスター大学の学者ドリュー）された。

この仕組みを利用した種付法（海に張った海苔網の所々に半分に割った竹やビニール袋のような容器をとりつけ、その中に牡蠣殻糸状体をいれる）で良質な海苔と収量の向上がはかられた。

〈道具〉海に張った海苔網。半分に割った竹。ビニール袋のような容器。



牡蠣殻による種付け法

（漁業資料館「展示資料」より抜粋）

❒地殻変動など観測機器（人見）

1、二等三角點標石

二等三角點（人見神社納札所付近）

人見神社（納札所付近）にある二等三角點標石は、小高い丘で周囲の視界確保が得られ測量の基準として好条件であることから、明治一八年（一八八五）三月設置された。日本の「三角測量史」における貴重な遺産である。

2、菱形基線測点

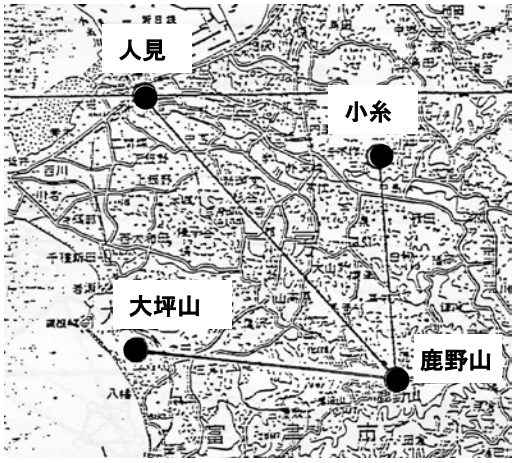
昭和三九年六月～七月、全国一四ヵ所（厚岸・水沢・房総・館山・丹那・高田・長野・御前崎・豊橋・京都・白浜・鳥取・八幡浜・宮崎）に設置されたうちの一ヵ所で「辺長測量」を実施

し、地殻変動の検出をしてきた。この菱形基線も展望所奥水神様付近にあり、一辺二五cmの八角、対辺間六〇cm、地上高さ五〇cmのコンクリート柱、上面中央には直径三cmで＋印のある金属標が埋め込まれ、側面には幅一二cm、高さ六cmの金属プレートに「NO・5基本　菱形基線測点　建設省国土地理院」の刻印がある。

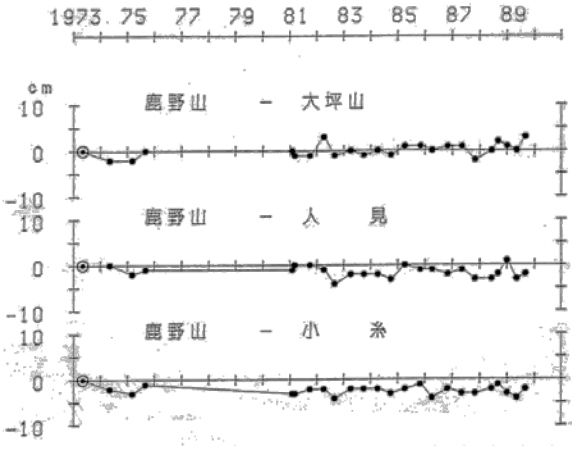
基準　菱形基線測点（人見神社展望所）
～平成23年7月1日～

3、千葉県の観測点

君津市周辺の「房総地区」と館山市周辺の「館山地区」で実施され、始点側に光波測距儀、終点側に反射鏡を設置し基線間の距離を計測した。



房総菱形基線場位置図



辺長の経年変化

房総地区は「人見（北西）」「小糸（北東）」「大坪山（南西）」「鹿野山（南東）」四観測点相互間（六基線）の距離を計測し、昭和四二年二月と翌年二月に観測した。

4、四観測点間による測量終焉

その後、昭和四八年～平成四年、変動地形調査（精密変歪（ヘンワイ）測量）として毎年一～二回程度、鹿野山～人見・小糸・大坪山の三基線を繰り返し観測してきたが、鹿野山と三基線間の視通確保が困難になってきた等により鹿野山を始点とした観測のみとなった。

平成一八年四月、人見神社から南東約一kmの小糸川沿い（現在の人見保育園）に観測点（ミラー）を移設し観測していたが、平成二三年三月人見保育園の新設に伴い、さらに東に約二〇m（現在地）移設された。

観測の目的は、東京湾周辺地域を中

反射鏡（人見保育園付近）

心に首都直下地震の前兆現象、活断層周辺の地殻歪の検出、地殻変動の活動度や歪みの蓄積を把握するとともに、地殻変動の時空間変化を明らかにすることを目的として行い、地震予知連絡会へ資料提供していた。

「この反射鏡は、鹿野山にある光波測距儀の光波を反射させ精密に測定するための鏡で、房総半島中部の地殻変動を監視するために設置された大切な施設です」。

鹿野山からの距離　約一一、一七km

連絡先　千葉県君津市鹿野山

国土地理院鹿野山測地観測所

０４３９－３７－２６６１

（反射鏡側面掲示物より）

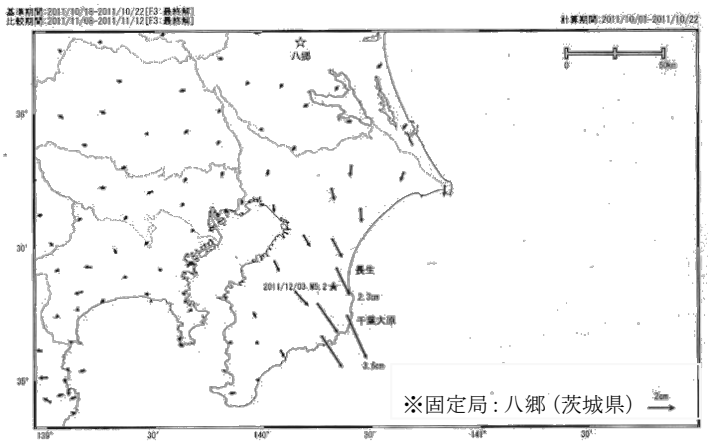
5、電子基準点網の整備

現在は、ＧＰＳ衛星を利用した電子基準点網が全国（一二四〇点）に設置され、リアルタイムで地殻変動を監視できるようになったため平成二四年で休止（中止）された。

※資料出典：国土地理院測地部計画課

房総半島での非定常地殻変動

房総半島で平成 23 年 10 月 26 日頃から 11 月 8 日にかけて、南南東方向へのゆっくりとした非定常的な地殻変動が観測された。

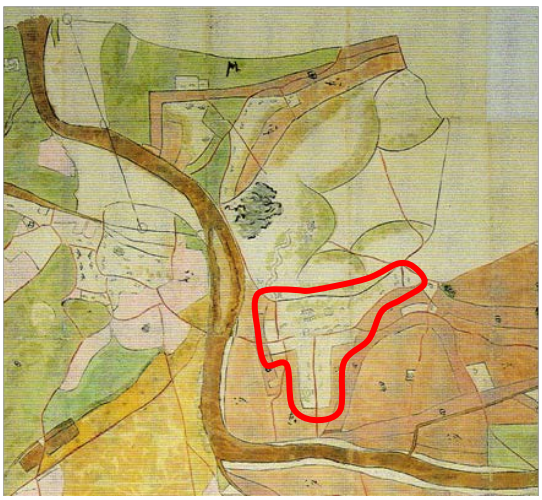


第二節　消滅遺産

❒塔中寺院大聖寺（人見）

青蓮寺の境内は広く一八〇〇坪有り、元禄七年（一六九四）甲戌一二月一二日の古絵図には、本堂と山門が描かれ、大きな伽藍だったことがわかる。

境内東側墓地に塔中寺院（大寺の中の別坊）大聖寺が建てられていた。水神山本覚坊と号し、※法印聖運（享保八年（一七二三）一〇月二〇日没）を初祖として八代続いた。



青蓮寺境内古絵図（赤枠内：本堂・山門が見える）

大聖寺が建立されたとされる約三〇年後の宝暦五年（一七五五）一二月一二日、火災により堂宇が焼失し古文書・過去帳など古いものが残ってないので再建の有無については不明である。

明治一七年（一八八四）までの財産届け書きが過去帳と共に残されているが、その後に青蓮寺に合併された。

大聖寺の御本尊不動明王は、合併した青蓮寺に移し祀られている。

（『人見郷土誌』）

※本書「第一一章　金石文　引用資料・補足説明 12」参照

不動明王

❒波の伊八彫刻（人見）

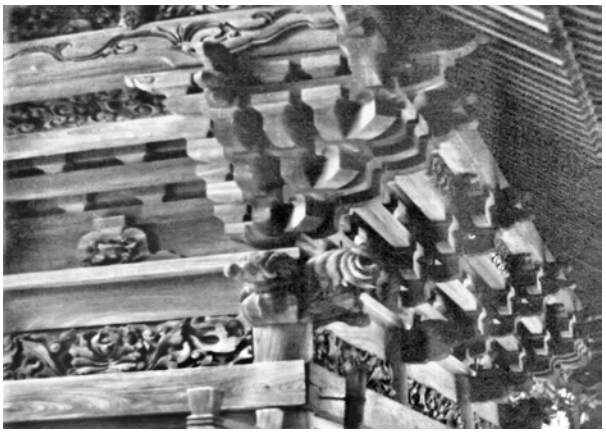
人見神社は、寛政九年（一七九七）一二月二二日、小笠原兵庫信偏（ノブエキ）と氏子の浄財で造営された春日造りの社殿で、江戸文化の粋を集めた一五〇点余の組物と 精密な彫刻の出来栄えが地元で高く評価されていた。

製作履歴など不明のまま、昭和四五年四月九日未明に発生した 浮浪者の火の不始末 で本殿や彫刻などが全焼したため幻の遺産となっていた。

作品の所在が忘れ去られようとしていた平成二三年、高瀬一利氏（市内外箕輪在住）より、昭和四〇年五月一三日に撮影した人見神社の組物と彫刻写真の提供があった。

焼失前の人見神社
（昭和 40 年 5 月 13 日）

建造物は春日造りの見事な組物、彫刻は向拝に嵌め込まれた龍。そして右脇陣は「董奉（トウホウ）」、左脇陣は「馬師皇（バシコウ）」で評判通りの見事な作品である。



社殿の 150 点余の組物・彫刻

董奉は中国が魏呉蜀に分かれていた三国時代の仙人で、人間界に三〇〇年ほど住み、病気の人々の治療をしたと伝

えられている。三〇〇年も人間界にいたが、仙人であるため董奉の姿は歳をとることがなかったという。董奉の傍らには常に虎がおり、害をなす者には襲いかかり困っている者は助けたと言われている。

董奉（右脇陣）彫刻

馬師皇（左脇陣）彫刻

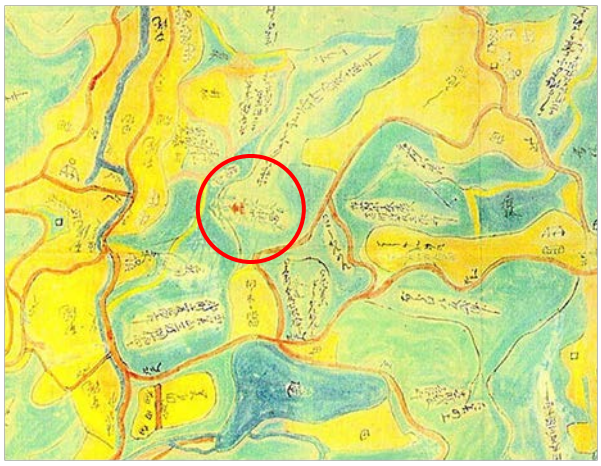
馬師皇は中国の神話時代・黄帝の頃（紀元前二五世紀）に、馬の医者だったという伝説上の人物。馬師皇が診察した馬はたちまち元気になったといわれるほどの名医だった。ある時、龍が空から降り馬師皇に診察を求めるとたちどころに診断を下し、治療を行い、龍の病を治したそうだ。のちに馬師皇は龍の背に乗り何処ともなく姿を消したという。（『中国の神話・民話：幻想世界神話辞典』）

これらの写真を手掛かりに鴨川郷土資料館・石川丈夫学芸員に鑑定依頼したところ、初代伊八作であるとの評価を得た。武志伊八郎信由（初代伊八）は、安房国（現鴨川市西条地区）で生まれ、文政七年（一八二四）七三才で没するまでの約五〇年にわたって、寺社建築を装飾する彫刻を製作する彫物大工で、特に躍動感に満ちた波の表現が優れていることから「波の伊八」と呼ばれた。

初代伊八の彫刻製作年表には、寛政八年（一七九六）から享和三年（一八〇三）迄の七年間に作品がない空白期間があった。この期間は人見神社の社殿を春日造りに造営した寛政九年（一七九七）頃と時代的に符合する。また、波や龍の彫刻作品が初代の作風であることから、四五才頃の彫刻作品に間違いないと比定された。この人見神社彫刻写真は、伊八の歴史年表の空白を埋め、幻だった江戸時代の周西文化史を蘇らせた。

❒山神宮

文政二年（一八一九）の坂田古絵図に「山神宮の赤い社」が描かれている。



「山神宮」　文政２年坂田古絵図

絵図より場所を推定すると「本縄」と「とうかんめん」の中間部で、現在の「本名輪遺跡公園」付近にあたり、君津台三丁目「とうかんめん公園」の西側と南側二ヵ所からのぼれる。

「山神宮」の跡地を探すため柵で囲われた東側の土手を少し上がると一〇坪位の広場があり高さ九〇cmの石祠があった。正面屋根部に「山神宮」、右側「寛政四子年一一月吉日」、左側に「茂田五良兵エ」と彫られている。石祠はこの人が奉納したのだろう。

「山神宮の社」跡地　本名輪遺跡公園東側

探索の結果、石祠と地籍図・古絵図の状況より、ここが里人から〝さんじんさま〟と呼び親しまれた「山神宮の社」があった場所で、山神宮の建立年は寛政四年であると比定された。

❒周西の水車

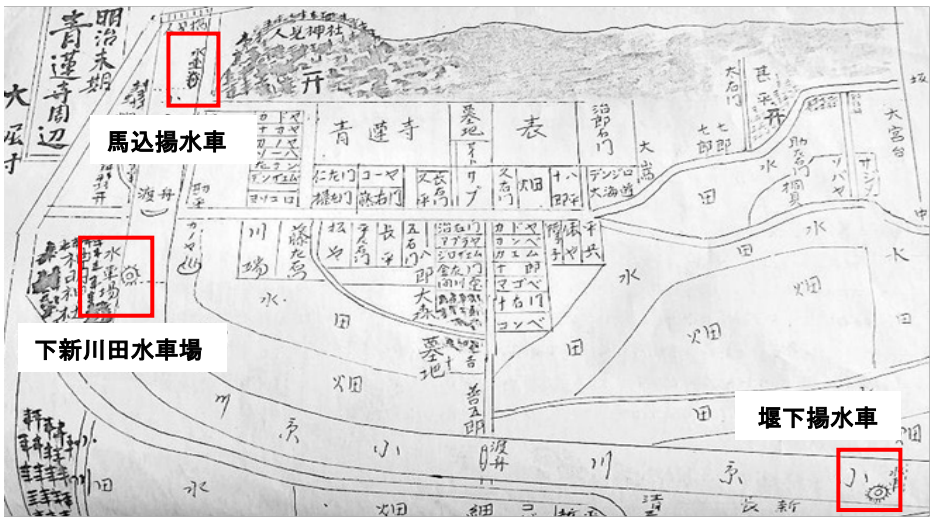
寛政四年（一七九二）、大堀村から人見村に出された「水車掛日限之儀人見大堀村両村取替議定書」に水車の記述がある（『人見郷土誌』）。

明治二八年（一八九五）三月、周西村人見部落（ママ）と飯野村二間塚との間で交わされた「用水車設置契約書」に、人見字下新川田の田方用水車設置に関する文書はあるがどこにあったのかわからなかった。

ところが、青蓮寺檀家総代川名邦五郎記（「人見山青蓮寺と仁王尊を忍ぶ（ママ）昭和四五年五月　庫裡建築記念」）の明治末期「青蓮寺周辺」手書き地図に当時の水車設置場所が記入されている。この地図より下新川田用水車を特定することができた。

一、下新川田用水車場

設置場所：人見字下新川田（人見耕



小糸川河口付近の揚水車位置図（明治末期青蓮寺周辺）川名邦五郎　作図

地整理地内)。

飯野村二間塚との関係（設置場所、工費など）で評価する必要がある。

◇設備概要

明治四二年（一九〇九）五月

灌漑面積　三、五ha

・型式　流し込み

・突揚程　三、六m

・揚水量　〇、五七五kℓ／分

妙見山より中橋方面（左上部枠内:下新川田揚水車場跡）
～昭和８年　写真所有者:鶴岡しげ～

・水車　直径　五、五m

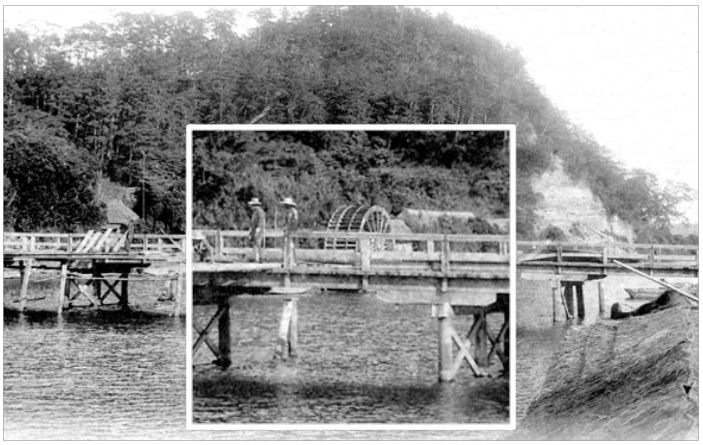
・輪幅　二、四m

・回転数　三、五回／分

・工費　三七〇円

二、馬込揚水車

設置場所：人見字馬込九〇二番地。小糸川の水をせき止めて一部の水を下に落とし、これを利用して水車を据え付け、川の水を汲み揚げ耕地に水を送



馬込揚水車(白枠内)
～絵葉書消印:大正６年７月７日　写真所有者:河井衣子～

る水車が設置された。神門もこれに見習い留場を新設して同型の水車を据付けた。この水車を製作したのは吉野村八田沼の大工石井桂蔵で、明治二二年七月（一八八九）完成した人見神社の御神輿も石井桂蔵の作である。

◇設備概要

明治三五年（一九〇二）四月修理。

灌漑面積　二〇、二四ha

・型式　流し込み

・揚水量　一、四五kℓ／分

・水車　直径　五、五m

輪幅　二、四m

・回転数　五回／分

・工費　一、〇七〇円

三、堰下揚水車

設置場所：人見字堰下三六三番地。明治二七年（一八九四）とあるが型式などは不詳。

◇設備概要

明治四三年（一九一〇）四月、老朽化のため改修。灌漑面積二八町歩。

・型式　流し込み

・水車　直径　一九尺（五、七ｍ）
　　輪幅　一五尺（四、五ｍ）
・回転数　五回／分
・工費　一、九四〇円

四、その他揚水車

　このほか小糸川上流域の中野・久保にも水車があり、当時として最良の農業機械だった。ちなみに、昭和五年改造（二回目）された久保揚水車は直径約一〇、九ｍで、鉄骨製大車が原動車の側方に取り付けた小車と歯車の噛み合わせで回転する構造になっていた。

久保揚水車と堰止め場

　富久橋が出来る前の水車は、橋の少し上流にあり川を堰き止めた水を久保の原へ揚げていた。堰を切る日は清和方面から木炭・薪を一杯積んだ川舟が何隻も揃い、木材をつらねたイカダも勇ましい掛声と共に下った。

❒灯台（人見）

　大正天皇御即位記念共同施設事業として、大正四年三月二二日、灯台を設置することが議決された。

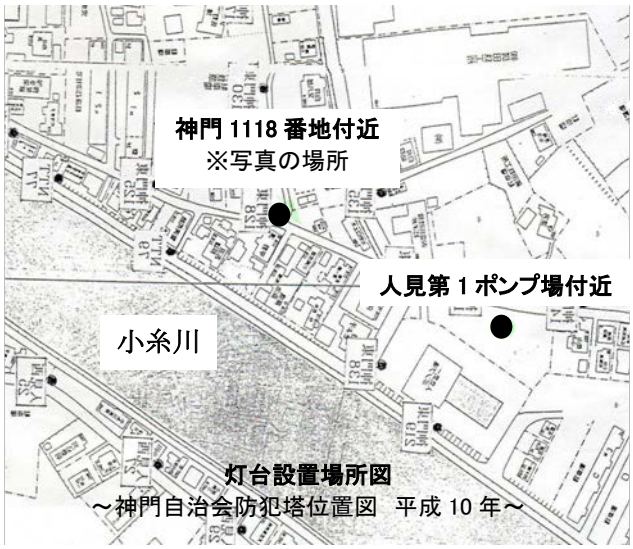
　また、史料には灯台の写真が記載され、昭和四〇年頃まであったと但し書きされている。

灯台（大正天皇御即位記念）

（『君津町漁業協同組合史料集１』の目録番号７３-４６　人見漁業組合）

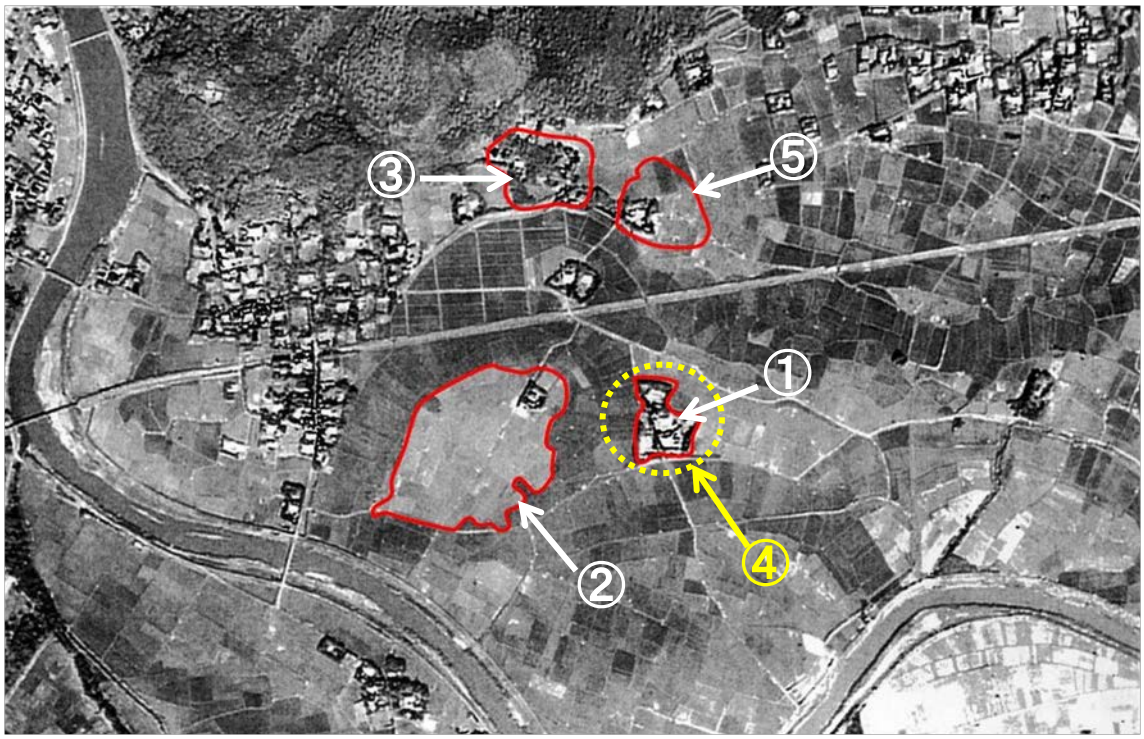
　この情報を手掛かりに設置場所を調べたところ、平成一〇年「神門自治会防犯塔灯台位置図」による場所表示提供があり、神門一一一八番地付近に一基、人見第一ポンプ場付近に一基、計二基あったことがわかった。

（情報提供　石井澄雄）



灯台設置場所図
～神門自治会防犯塔位置図　平成 10 年～

周西丘陵標高図（単位：m）
昭和 30 年頃　君津町全図より



人見土地区画整理前の地名呼称
昭和 30 年頃　君津町全図より

①えのがでー　②むかいがらでー　③どうげつでー（周西幼稚園付近）
④げーろーじま　⑤おおみやんでー